

## 木材あらかると

# 先史時代の木材の利用

## その1(縄文時代とそれ以前)

### はじめに

森と木と人のかかわりは、太古の昔から地球上のどこでも親密でした。そして、多くの文化が、その交流の中から生まれてきました。

そして今日、森と木を“自然の理”のなかで上手に生かし育てながら、新しい木の利用の歴史を生み出していくことが求められています。多くのすぐれた技術に裏付けられ、しかもこれからの時代の要求にマッチした、新しい「森と木の文化」を創り上げることが、これからの21世紀に期待されています。

将来を見据えるための礎石のほんの一片として、地球上の生きとし生ける者の中で、最も巨大・長寿で、歴史を物語る「森と木」vs.「人」のかかわり合いのルーツや古代人達の木材の使い方や利用の知恵などを探してみたいと思います。

### 人類誕生は、木の使用のはじまり

地球が誕生して46億年。海ができて38億年。陸地に植物が上陸して24億年。

そして、私たち人類の祖先が登場したのは、約400万年前・第3紀の終りです。

そのころ、原始の森の中の樹の上でウタタネしていた一匹の利口なサルが、うっかり樹からころげ落ちました。びっくり仰天、とっさに横に張り出していた一本の枝を、2本の前足(後に手となる)でつかみました。運悪く、その枝が折れてしまい、枝をつかんだまま落下しました。つぎの瞬間、2本の前足で地面に立ちました。

これが、人への進化の決定的瞬間(?)です。

つまり、私たちの遠い祖先の誕生は、直立歩行によって自由になった手で、最初の道具をつくり出した時にさかのぼるのです。これは、科学的社会主義を唱えた、エンゲルスの「サルが人間になるにあたっての労働の役割」(1876年)から連想

されるお話しです。

別の話しとしては、木の股から人間の赤ちゃんが生まれたという無邪気なお伽噺もあります。

また、アダムとイブがイノシシの肉やお魚を食べたからではなく、木の実のリンゴをたべたために人間の知恵を得たとする聖書の教えもあります。

このように木を使い、また何にかの理由で、森からはみ出してしまった、あるいは勝手に出てきたサルがいたから人類が出現したということもできます。ですから、人は森とつかず離れずの関係をもっています。森の中だけでは生活できないけれども、森のないのも困ってしまいます。人は、そういうつながりを、森や木に対してもっているわけですよ。

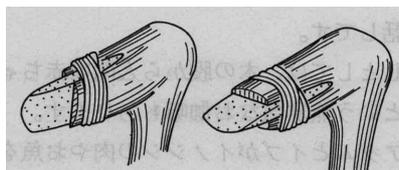
### 原始時代の素朴な “木の使用”

私たちにつながる祖先は、約10年前に登場し、自然にあるものを採取して暮していました。樹の枝を使って動物や敵と闘ったり、倒れた木を利用して河を渡ったり、枯枝を集めて火を燃やしたり、その火をつけるのに乾いた枝をこすり合せたりしました。このように、人は、はじめから身近にある木を道具として使用してきました。

しかし、樹・木をそのままではなく、切り倒し、手ごろの大きさに切ったり削ったり、穴をあけたり、つないだりして、ある目的をもった形にして、その目的のために用いることを、今日的な意味での“木材利用”ということにすれば、それは数万年~数千年前からということになります。

ところで、原始時代の人たちは、何を使って木を切りたおし、加工したのでしょうか?

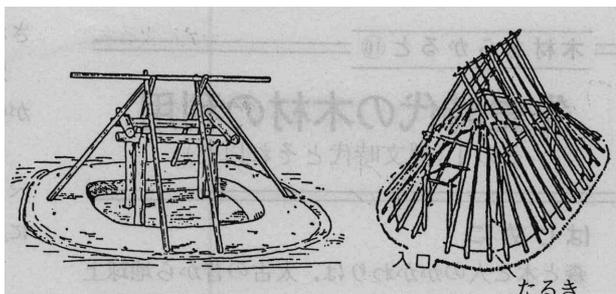
はじめは、石の<sup>刃</sup>が使われ、大きな魚の歯を使って丸太を欲しい長さに切ることを覚え、さらにその木の何本かを植物の繊維で束ねて、丈夫な橋などを作ることができるようになりました。このような技術を持つようになると、洞穴から出てきて、住まいを作るようになります。右の多いところでは石を積み、あるところでは土をこねて、木材で焼いてレンガを作り、積み重ねました。森の豊かなところでは、はじめ細い木をたる木として



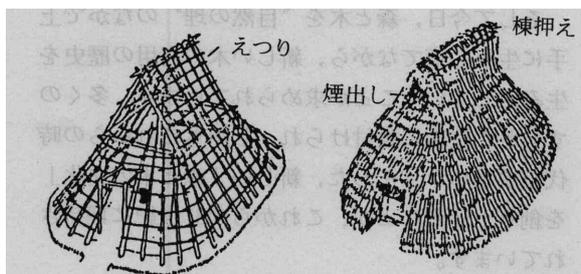
縦型 模型  
(おの・まさかり) (ちょうな)  
石斧の柄(え)のつけ方  
(成田著「木の匠」より)



赤ウルシ塗りの飾り櫛  
(稲本著「木は生きている」より)



A 柱をたて、桁をかけ、棟木をのせる  
B たるきを斜にかけ



C たるきを積木(えつり)で結ぶ  
D かやをかけふき上げて完成

竪穴住居のできるまで  
(稲葉・中川著「日本人の住い」より)

円錐形に立て、植物繊維で横方向を結び、その上をカヤのような長い草でおおって住まいとしました。そして、住まいの構造をもっと丈夫で、広いものとする技術が発達し、わが国では竪穴式住居を建てるようになりました。

### 縄文時代にはじまる "木の利用"

日本で、木を道具の材料として使ったもの、つまり現代の用途と同じ目的でつくられたもので、今までに一番古いと判ったものといえはまだ米作りを知らなかった縄文時代前期・約6千年ほど前の木工遺物の類があげられます。当時は、金属の道具はなく、木の加工はもっぱら石器(右の斧、ナイフ、キリなど)によりました。

その一つの例に、福井県の若狭湾ぞいに連なる三方湖の鳥浜貝塚の遺跡が思い浮びます。日本で最古最大の木工品が出土しています。おびただしい数の木製品は、縄文人がいかに木の性質をよく知り、毎日の暮らしの中でうまく使いこなしていたかを証明しています。

大きいものでは、くりぬきやすく水もれしないスギの丸木舟。全長6m、幅60cm、木の根元が舟尻になるように使っています。丹底の厚さを、約3.5cmと均一に削っていますが、これは現代の工具や技術をもってしてもかなり難しいことです。このような割舟(くりぶね)が、乗り物のはじまりとなりました。

家などの柱には直径10cm位のスギ、ヒノキ、クリなどの丸太が使われていました。トチやケヤキの木の器も日常生活に使っていたらしく、なかには厚さ4~5mm、直径3mmもの大きなボールがあります。また、木を伐るための右斧の柄(え)にはユズリハ、シイ、ツバキ、サカキなどのねばりのある材が、丸太弓にはカシ、クリが使われました。用途による木の種類や材質の選択も全く現在と変わりありません。

だが、なんといっても最大のおどろきは、ベンガラをまぜた赤いウルシ(漆)をぬった、飾りぐし(9枚の歯をもったツバキの縦櫛)です。

製品による木工・建築の移り変わり

成田著「木の匠」より

時代区分(西暦)		移り変りの順序と内容	技法・キーワード
原始時代	縄文 前1万 年ごろ  [石器 時代]	(ほぼ現在の日本ができる。縄文式土器が作られる) ・丸太のままで筏(いかだ)を、枝で弓などを作った ・丸太を割って、角材や厚板とした ・竹やツルを編んで、カゴやザル、クシなどを作った ・それらに漆を塗って補強した ・丸太を立て、枝を結び、草、カヤをふいて住居とした ・丸太をくり削って舟とした ・枝や木の塊をくり削って容器や舟のカイを作った ・木製の容器類に赤や黒の漆を塗った ・木製の精巧な弓や刀剣などを作った	(縄文文化が起る) (狩猟・採集の生活) 造 材 編物(あみもの) 漆の利用 掘立住居 刳舟(くりぶね) 刳物木工 漆器(しっき) 武 器
	弥生 前3百 年ごろ  [青銅 鉄器 時代] 239年	(北九州に稲作の技術が伝わった。農耕がはじまる) ・丸太・角材・板材を田のあぜや築えん(せき)などの工事用材とした ・木のクワ・スキなどの農耕具を造った ・ウス・キネ・ツチ・ハチ・盆(ボン)などの生活用具が盛んに作られた ・軸組架構による建築工法が始まった (ヤマタイ国の女王ヒミコ、魏に使いを送り、金印を授かる)	(弥生文化が起る) 土 木 農耕具 刳物木工 高床建築
大和時代	古墳 367年	(朝鮮の百済から初めて使いが来る。大和朝廷の統一が進む) ・刳舟から刳材複合船・構造船へと進展していった ・棟木(むなき)・母屋・たる木により屋根が大きくなり、堅魚木(かつおぎ)が上った ・古墳・築堤・運河などの大土木工事が行われるようになった ・木の棺(かん)が作られた ・机・腰掛・台などが作られ始めた ・礎石・かわらぶきの建築技法が渡来した	(古墳文化が起る) 造 船 殿舎、神社建築  土 木 指物木工のはじまり 指物木工 寺院建築
	飛鳥 539年  596年	(百済から仏教が伝わり、593年聖徳太子が摂政となる) ・仏像など仏教用荘嚴具が作られ始めた (飛鳥寺創建)(607年法隆寺創建)	(大陸文化が広まる) 彫刻・工芸

縄文人がもっとも精神を集中して、最高のテクニックを駆使してつくったものですが、そのデザインや加工のすばらしさには目を見張られるものがあります。

これが、わが国内で独自に創始された世界最古のウルシぬりの作品です。ちなみに、日本のこと

を英語で(JAPAN)といいますが、ウルシや漆器も同じです。

このように、縄文時代の木の文化=わが国における木の文化の起源、そしてその相当部分が日本の文化の源を占めている、このことを見直してみたいものです。(以下次号) (鎌田昭吉)